誌面の向こうにある委員会活動

山　本　裕　紹
（宇都宮大学）

本誌の編集委員会にのべ 10 年間参加した．平成 20 年度に初めて編集委員を務め，その後，平成 25 年度には光科学及び光技術調査委員会（光光委員会）の関西の委員長として再び関わる機会を得た．令和に入り，令和 2 年度から副編集委員長として，令和 4 年度には編集委員長として本誌の発行に携わり，多くの企画審議や原稿編集に奮闘してきた．こうして関わる中で，編集委員会は単なる誌面づくりの場ではなく，産官学がフラットに語り合える学びと交流の場であることを実感してきた．

かつて編集委員会はすべて対面で行われ，懇親会も開催された．その中で企業人の考え方を知り，他大学の先生から研究費を獲得するコツを教わるなど，人的ネットワークを広げる機会にも恵まれた．こうした交流は，貴重な学びの時間であった．

光光委員会での活動も忘れがたい．注目論文を紹介するプレゼンでは，委員からの容赦ない鋭い質問にさらされた．会議後の慰労会では，同じ苦労を経験した仲間との語らいが何よりの楽しみであり，委員会活動を通じて，多くの企業・大学の方々と信頼関係を築くことができた．

一方，私は現在，電子ディスプレイの国際標準規格を策定する IEC/TC110 の日本代表（Head of Delegation）を務めている．標準化の委員会では企業の立場が強く，議論も慎重に進められる．編集委員会のように自由闊達に意見が飛び交うというよりは，各社の視点を尊重しながらの合意形成が重視される．だが，国際標準を提案するには少なくとも 5 か国の支持が必要であり，学会活動で築いたネットワークがその支えとなっている．編集委員会での出会いや議論は，研究だけでなく，その先の社会実装にもつながっている．

本号の特集「2024 年日本の光学研究」は，多くの方々による注目論文の推薦と，選定委員会での複数回の審議を経て構成されたものであり，編集委員の尽力の集積である．

誌面の向こうには，こうした委員会活動を通じて培われた人と知のネットワークが広がっている．若い読者の皆さんにも，ぜひその魅力と可能性に触れていただきたい．